

旧植田家だより

KYU-UEDAKE INFORMATION

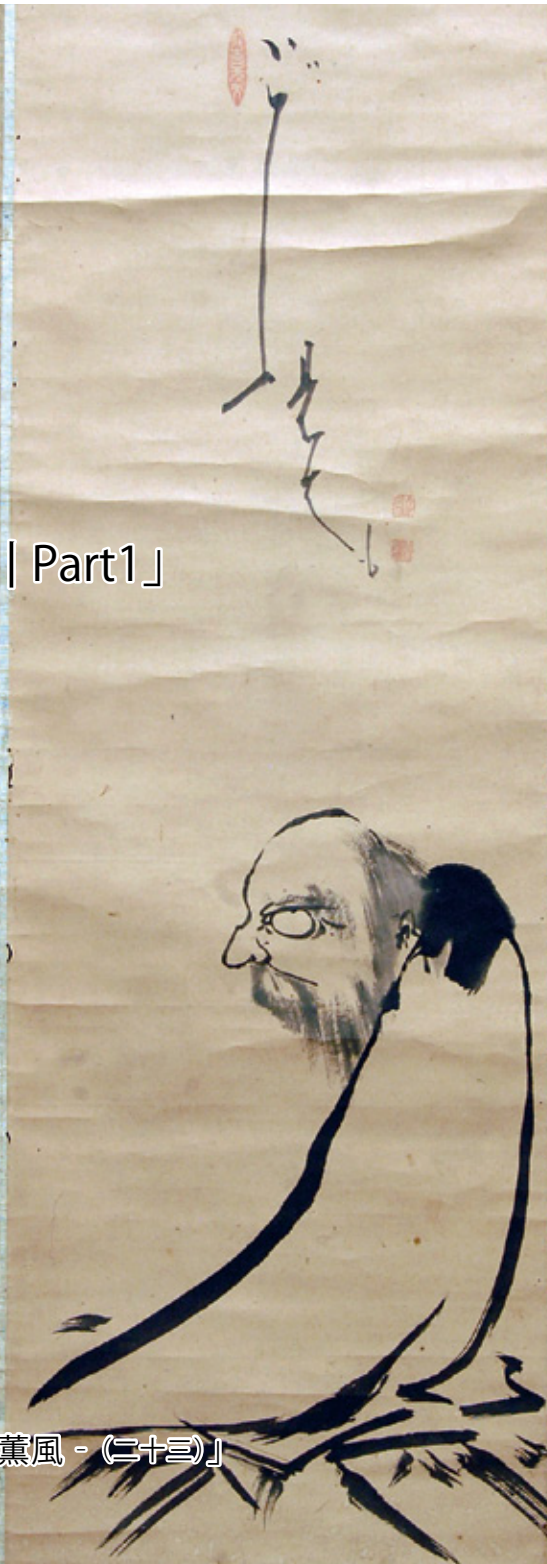
Vol. 29

2016年7月発行

平成 28 年度 企画展
ぼく、墨蹟

旧大和川を歩く
「ぶらり長瀬川 Part1」

連載コラム
「落穂拾い - 今東光の薫風 - (二十三)」



展示のご案内

→6ページに関連記事

夏季企画展

植田家の お茶道具

2016年
7月2日(土)～9月11日(日) ※会期中、一部展示替えあり

待ってるカニ



蟹 産 直

夏季企画展

「植田家のお茶道具」2016年7月2日(土)～9月11日(日)

植田家に伝わるお茶道具の数々を展示しています。 ※休館日はP15をご覧ください

.....

納涼企画2016

「冷やし旧家 はじめました。」

～9月11日(日)まで実施

井戸水で足水体験、昔ながらの蚊帳体験、期間限定ラムネ販売など
暑い夏を旧家で涼しくお過ごしください。

Contents

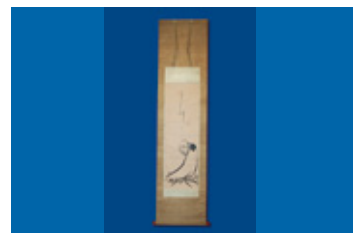
- 4 | 平成 28 年度 企画展
「ぼく、墨蹟(ぼくせき)」
- 6 | 告知
お茶道具と冷やし旧家はじめました。
- 7 | 講座「八尾と今東光」
- 8 | まちあるきイベント
「旧大和川を歩く～ぶらり長瀬川 Part 1～」
- 10 | 八尾再発見！映像に見る八尾
- 11 | 四会所だより(9)
- 12 | なにわの伝統野菜栽培日記 ㊿
- 13 | 植松のまち・ひと ー第18回ー
- 14 | コラム「落穂拾い - 今東光の薫風 - (二十三)」
- 15 | 旧植田家住宅のご案内



表紙写真

だるま 白隠慧鶴 伝
《達磨図》伝白隠慧鶴 [1685-1768]

禅の教えや精神が絵で表現された禅画のひとつ。
本図には「どふみても」という言葉が添えられています。茶掛けをはじめとする墨蹟(書)の作品を集めた企画展「ぼく、墨蹟(ぼくせき)」の記事は、本誌 4・5頁に掲載。



※『旧植田家住宅だより』のバックナンバーはホームページからダウンロードができます。
<http://kyu-uedakejutaku.jp>

ぼく、 墨蹟 (ぼくせき)

～ I am Bokuseki ～



妙心寺管長・神月徹宗(清竹)《竹有上下節》(部分)



伝白隠慧鶴《達磨図》(部分)

まんじゅう!?



相国寺管長・荻野独園(退耕)《円相》(部分)

これ食みてうまきん



慈雲《莫妄想》

妄想することなかれ!

平成28年度 企画展

「ぼく、墨蹟(ぼくせき)」

「墨蹟(ぼくせき)」といえば普段あまり耳慣れない言葉ですが、「書」と聞けば何となくイメージができます。墨蹟は中国では広く真跡(自筆の書)全般を意味し、日本では禅宗の高僧による書(印可状など)を指します。本企画展では墨蹟を「筆で書かれた文字やその筆跡・書跡」としてとらえ、旧植田家住宅が所蔵する古今東西の墨蹟(書)を展示しました。

植田家には、古くから地域文化や教育または諸寺院との関わりの中で伝えられてきたと考えられる、宗派にとられない様々な僧の墨蹟がのこされています。とりわけ、お茶の席で用いる多数の茶掛けの軸は、禅宗の教えに通じるものがあり、日本の茶の湯と関係が深いことも分かります。

普段あまりふれる機会の少ない書の掛軸の前に、『あなたが墨蹟?』『ぼく、墨蹟です』と、頭の中で作品と会話を楽しみながら観覧する企画展では、言葉や文字の形、筆跡の面白さにふれることができ、難解で判読できなかった書もそのまま展示してあり、様々な会話も弾みました。また茶掛けの軸は、次回の企画展「植田家のお茶道具」への導入として、書に



左から荻野独園《円相》、
間中定泉《和》《壺中日月長》、
明心和尚《秋》《冬》



明心和尚(不詳)の《春・夏・秋・冬》シリーズ。
写真上は前期、同下は後期で展示。

能書家としても有名な慈雲の墨蹟



「どうみても…」と何か言いたげな達磨の図



難解な字体の墨蹟(清水公照の書)。観覧者と一緒に
文字を解説。(左から「黙笑」、「露堂々」と判明)

関心のある方だけでなく、お茶の世界にもつながっています。

今回の展示は、諸寺院の高僧による書がメインですが、注目すべきはやはり「禅語」とも呼ばれる「言葉」です。《壺中日月長》、《竹有上下節》(竹に上下の節あり)、《莫妄想》(妄想することなかれ)など、めまぐるしいこの世の中にとつて必要なことが僅か数文字で言い表されています(それぞれの意味はぜひ調べてみてください)。また、こうした言葉を形にした「禅画」といわれるものの中にも、多くの意味が含まれています。今回展示した中では、《達磨図》や《円相》がそのひとつで、禅の思想や私たちの心の様相を捉えています。

絵や言葉は、何か「あるもの」を伝えていますが、それを受け取ることをしなければその意味は存在しません。そのためには、その相手を理解しようとすることも必要ですが、自分自身を見つめなおさなければならぬということが、問われています。伝白隠慧鶴の《達磨図》にはユーモラスな達磨の絵に「どふみても」という言葉が添えられています。どうみても何であるのか、それは見る人次第だということなのかもしれません。

(旧植田家住宅学芸員 安藤亮)



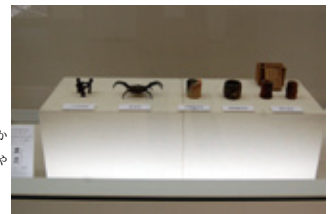
～9月11日(日)まで開催中

企画展「植田家のお茶道具」開催中

現在開催中の夏季企画展では、これまで要望の多かった「お茶道具」を展示しています。茶道(茶の湯)の道具といえば、釜、茶碗、茶筌等が先に思い浮かびますが、実際には、掛物をはじめ香炉、花入、風炉、風炉先、炉、五徳、灰炭、釜鉤(鑢)、香合、水指、茶壺、茶入、茶杓、蓋置、建水、菓子器、柄杓、帛紗…など、40以上もの道具を使用します。さらに個々の道具にも様々な種類があり、その数は無限大ともいえます。その中で、季節や場面に応じて道具を選び、所有者の好みが如実に表れるのも茶道具の魅力の一つです。

さて、植田家のお茶道具はというと、一般的な道具から格式ある千家十職のもの、さらには遊び心のあるものまで、幅広く取り揃えてあります。実際に使用していた往時の植田家を想像しながら展示をお楽しみください。

冷やし旧家 はじめました。



展示室に蟹!?

同じく期間中は、昨年も好評の納涼企画「冷やし旧家、はじめました。」を実施しています。井戸水を張ったタライに足をつける足水体験や、蚊帳に入る体験のほか、期間限定でラムネとみかん水も販売中です。もちろん足水をしながら飲むこともできますが、体の冷やしすぎにご注意ください。

さらに、今年は夏の装いとして、数十年前ぶりに一部の建具を夏の建具(簾戸)に替えました。視覚的にも涼しくなっています。

なおこのイベントは、気温によって開催期間が変更になる場合があります。また蚊帳体験は実施していない日時もありますので、詳しくはホームページをご覧ください。だくか、旧植田家住宅まで、お問い合わせください。



足水を体験するこどもたち

講座

八尾と今東光

講師 岡本 俊樹氏
(今東光資料館)

平成28年5月28日(土)
於・旧植田家住宅



八尾市の今東光資料館では、9月11日(日)まで、企画展「東光が記した『八尾のブラシ』」(以下、今東光資料館広報記事を引用)「人生の紆余曲折を経て辿り着いた八尾の地で、その歴史・文化・人情の懐の深さに驚き、魅了され、見聞きしたことを文学作品のなかに留めようとした作家、今東光。」

その作品には、当時の八尾の産業や、それに関わる人々の生活の様子も随所に散りばめられています。その中でも、八尾の代表的産業である「ブラシ」にまつわる話を、小説中での記述や、当時の写真・資料・ブラシ等と併せてご紹介いたします(以上引用)

今回の講座では、今東光資料館の出張講座も兼ね、資料館の岡本俊樹氏に「八尾と今東光」をテーマに、平成26年の講座「今東光と八尾」(資料館開館記念として実施)を受ける形で、2年越しでお話をいただいた。講座の前半は、第1部として今東光の人物像をはじめ、今東光が八尾にたどり着いた昭和30年代前後を中心に話が進められた。講座の中では、時代の背景を押さえながら、今東光の住職としてまた作家としての顔を次々と明らかにし、その交友関係や作品の中身についても言及された。

特に河内の文化や風土、人々などを生き活きと描いた「河内もの」は、良くも悪くも、いまなおこの今東光のイメージそのものであり評価であることを考えさせられる。またその評価に対する評価としての直木賞受賞やその後の活躍も紹介され、後半の第2部へ続いた。

第二部は、冒頭でふれた企画展の話が中心となった。内容については、ぜひ一度(といわず何度も)今東光資料館へ足を運び、実際に展示をご覧いただきたい。講座ではその展示の内容について一つ一つを丁寧に説明をされたが、聞くと見るとでは違うということを実感してもらえればと思う。

時代が新しくなるにつれて薄れていく昔の記憶や時代の匂いのようなものが、今東光の作品の中には閉じ込められている。しかしその閉じ込められた何かは開けてみるまで分からない。講座や展示の使命はこういうところにもあるのかもしれない。

(旧植田家住宅学芸員 安藤 亮)

今東光資料館 企画展

東光が記した『八尾のブラシ』

～小説河内風土記から～

9月11日(日)まで開催

※入場無料

今東光資料館
(八尾図書館3階)
八尾市本町 2-2-8
AM10:00～PM5:00
休館日 月曜日(祝日は開館)
TEL 072-943-3810



③府営八尾二俣住宅

旧大和川の河川敷のため砂地であった。その砂を高度経済成長期に掘って売却した低地に府営住宅が建った。



④式内弓削神社(東弓削)

いつのときかの大和川の氾濫で、もとの弓削村は押し流され、村民は東西に分かれ、若江郡東弓削村と志紀郡弓削村になった。
※画像は古写真に写る弓削神社との比較



⑤東弓削郷倉

江戸時代、郷村に設置された公的な穀倉。本来は年貢米輸送のための一時的な収納倉庫。中期以降、幕藩の備荒貯蓄策に従い、主に非常救済・貸付用の貯穀倉として利用された。近年建て替えられ、入口下屋部分のみ残されている。



⑥水路(暗渠)

二俣新田と天王寺屋新田の境界線にある水路。これより北が天王寺屋新田。



⑦西側堤跡段差(坂)

旧大和川の堤の跡(傾斜)がよく分かる場所。



⑧稲生神社

久宝寺川(長瀬川)の南西の堤の一部と考えられる。



⑨天王寺屋地蔵

市内で最古とされる永仁5年(1297)造像の地蔵が安置される。※画像は稲生神社側から



⑩八尾市立リサイクルセンター

平成21年5月に開設。学習プラザ「めぐる」の市民啓発をあわせて、ごみの減量・リサイクルを進めて循環型社会の構築を目指す施設。



⑬レンガ造の工場

昭和三年頃の建造で、現在は食品工場として利用されている。
※当日は敷地内に入れていただきました。



⑪植松共同墓地

行基河内七墓(植松・恩智・垣内・神立・岩田・長瀬一奈良時代)の1つで古い墓地。
※当日は墓地を研究されている参加者の常連の方に、珍しいお墓のお話をいただきました。



⑫道標(竜華橋の柱石を転用)

「右 八尾駅→/文政十一戊子年(1828)九月吉辰 綿屋清八/龍華橋世話人(16名の名)」かつてはJR八尾駅北西の「龍華橋」の親柱であったものを、八尾駅ができた時に転用し、この地に建てたものと考えられる。



⑭淡川神社

※旧大和川の堤の高さを感じられた。

まちあるきイベント 旧大和川を歩く ～ぶらり長瀬川編 Part 1～

宝永元年（1704）の大和川付け替えによって新田開発された旧川筋には、歴史ある史跡や名勝、名所のほか、その痕跡がたくさん残っています。まちあるきでは、さまざまな魅力ある場所を発掘します。

「旧大和川を歩く～ぶらり長瀬川～」シリーズでは、前回のPart4（志紀～柏原）で八尾市内の旧大和川治いを全て制覇。今回は、もう一度原点に戻り、約5年ぶりに志紀～八尾駅間の最初のコースを歩きました。

2016年4月9日（土）朝9時、JR志紀駅に集合した11名の参加者とともに八尾駅周辺を目指して約3時間のまちあるきを行いました。5年の間で様変わりしたまちの様子に驚きつつ、常連の方々も新しい発見があったようです。もちろん初めての参加者もあり、旧大和川の歴史や地形を直に体感することができました。



①万葉歌碑

八尾唯一の万葉集にうたわれた場所。この付近は、旧大和川の河川敷にあたり弓削の河原と呼ばれたが、常に膨大な土砂を堆積したので、しばしば氾濫し、流路が絶えず変化した。この歌は弓削の河原にある埋もれ木が、やがて現れでるように、私たちの仲は知らないはずもないという心情を詠んだものである。

「真鉤持 弓削河原之 埋木之 不可顕事 爾不有君」
(巻7・1385 読人知らず)

「ま鉤もち 弓削の河原の 埋れ木の 顕わるまじき ことにあらず」

→(ま鉤もちは意味なし) 弓削の河原の埋もれ木のように現れず(表面化しない)に済むことではないのだ(けれど、現れないでほしい)



②西村市郎右衛門の碑（大正5年建立）

付け替え後、了意川の水源を失い水不足になった志紀郡の村々を、新大和川に樋を切ることで救った弓削村の庄屋西村市郎右衛門を称えた碑。※画像は踏切側から撮影

八尾市のまちなみに関する写真と映像のミニ展示

八尾再発見！



映像に見る八尾

マルマル

2016年6月11日(土)・12日(日)

※好評により19日まで延長しました



映像資料(写真、フィルム等)を通して発見する「映像にみる八尾」
(映像の詳細は「植田家だより15号」に掲載)

6月11日(土)・12日(日)の2日間、旧植田家住宅・土蔵2(講座室)で、「八尾再発見！映像にみる八尾」と題したミニ展示を行ないました。同タイトルのイベントは過去にも何度かありましたが、毎回中身は別物です。「〇〇にみる八尾」シリーズのひとつとして、今回はこれまで実施してきた旧大和川のまちあるきの総集編と、植田家へのこされたフィルムの映像を4年ぶりに公開しました。

展示に使用したパネルは、平成22年に作成し

た長瀬川編と玉串川編の2種類で、当時と比べまちの様子は随分と変わりました。その違いを発見する楽しみも展示で味わえました。

映像は、9・5ミリと16ミリのフィルムで、昭和初期の植田家の様子や大阪の町などが記録されています。また当時のアニメーション作品等も含まれ、八尾の旧家へのこる映像を通して、八尾にはまだまだ面白いものが埋もれていることを再認識しました。

(旧植田家住宅スタッフ)



「大和川付け替えと新田開発 新田の今とすこし昔のまちのようす～長瀬川編・玉串川編～」平成22年(2010) NPO法人HICALIが作成

四会所だより (9)

三会所（大阪府内に建物が現存する三つの会所間での呼称）のひとつである安中新田会所跡旧植田家住宅は、旧大和川主流である長瀬川左岸にあり、宝永元年（一七〇四）の大和川付け替え後に開発された安中新田の会所（屋敷）を継承した土地と建物が平成十八年（二〇〇六）六月に八尾市の指定文化財と史跡に指定されています。安中新田は、柏原市の安福寺が中心となって開発されましたが、正徳元年（一七一二）作成の『安中新田分間絵図』（市指定文化財）には、安福寺をはじめ、老原新田、瓜破新田、慈願寺新田といった新田名もみられ、「安中新田」は複数の主体によつて開発された新田の総称であることが分かります。（一説によると安福寺の「安」と中心の「中」で「安中^{やすなか}」になったともいわれます）

安中新田に関する古文書では、大和川付け替え後に初めて行われた検地を記録した宝永五年（一七〇七）の「安中新田検地帳写并覚書」が最も古く、市内の大和川付け替え

に伴う新田開発の資料の中でも最古のものです。また、享保六年（一七二一）に作成された「安中新田検地帳写」は、その後の新田開発の様子や畑地の評価の見直し等が行われたことを知る上で重要な資料であり、いずれも江戸幕府が作成した検地帳を正確に写し、安中新田の開発からその後の展開までは大和川付け替えに伴う地域の歴史を伝える貴重な文化財として「安中新田検地帳」の名称で平成二十七年三月に八尾市指定文化財に指定されました。

今回は、安中新田に関する一部の資料紹介をしました。現在進行中の三会所交流では、平野屋新田会所（大東市）も合流し、四会所として動き始めています。新田開発から三〇〇年以上が経ち、いまなおその歴史の保存と活用を考えるささやかな活動を今後も緩やかに見守ってもらえればと思います。なお「三会所だより」の名称は今回より「四会所だより」に変更してお届けいたします。各会所（鴻池新田、加賀屋新田、平野屋新田）のイベント等についてはそれぞれのホームページ等をご覧ください。

（安中新田会所跡旧植田家住宅 安藤）



享保6年安中新田検地帳写

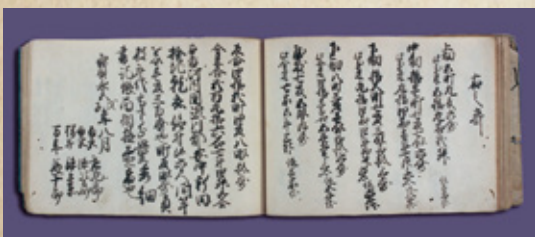


正徳元年 安中新田分間絵図

「安中新田検地帳」

「安中新田分間絵図」には、現在の旧植田家住宅の位置に「会所屋敷」と記され、かつてこの場所が安中新田の会所であったことを示す。

「安中新田分間絵図」



宝永5年安中新田検地帳写并覚書

なにわの伝統野菜 栽培日記

No.29

【トウモロコシ VS カナブン】

梅雨入りしてから、ますます湿度で髪の毛がペタンと顔にへばりつき、おにぎりの海苔状態、不快指数急上昇の私とは裏腹に、何のストレスもなさげにグングン背を伸ばすトウモロコシ。早いものは5月の中旬、雌穂しすいから絹糸けんし(ヒゲ)が出だし、末にはほぼ出揃い、ヒゲの色も変化していった。

トウモロコシの栽培は、害虫予防はもちろんの事、密植えし、人工受粉(※)するのが望ましい。自然の風でも受粉するが、実は、



モロコシチェック



トウモロコシ収穫



背比べ(162cm)

トウモロコシのヒゲ一本が実一粒になる(ヒゲの数と実の数は同じ)。なので確実に受粉できないと、皮をむいたら、あらガツカリの「抜けモロコシ」になるのだ。

受粉が無事完了すると、ヒゲの色が茶色になる。収穫の目安はこのヒゲが茶色から黒に近いこげ茶色になり、実もしっかり張った頃。適期は短く3日〜5日ほどでタイミングが難しい。獲り遅れるとシワシワになって台無しに…。

さて、そろそろ本題に。前号のリベンジ、さあ、どうなったかと申しますと…、ぐあはははは〜!! 『KAMAポロ勝ち〜(圧勝)』。一匹のカナブンにも頭を突っ込ませることなく(というより姿を見ることなく)無事全て収穫! 品種的に先まで実が入りにくかった事と後半、多少アブラムシにつかれたものの、6月初めに半分を収穫。その後子どもたちが育てた「一人一本」は、個々の成長の違いから個別に収穫した。こちらもカナブンの被害はゼロ。

今、この記事を書いている7月初め、畑で大きく育ち、収穫が始まった黒門越瓜くろもんこせうりの花にカナブンが数匹、頭を突っ込んでいます。(m)

なにわの伝統野菜 栽培日記

～番外編～

トウモロコシ対決!
2016夏

VS



カナブン

※ヒゲが出たら雄穂ゆうすい(先端のススキの穂状のもの)を切り取り、ヒゲの上で花粉がヒゲにまんべんなく落ちるように振る。

KAMAと
畑メンバー



WINNER!



植松のまち・ひと

第十八回

◇植松灯籠の日2016・5月

まだ少し明るさがあるころ5月の夕暮れ、正確には2016年5月7日(土)の18時45分、いつもの金毘羅灯籠に灯りが灯った。昨年11月の「植松灯籠の日(夜間開館)」から早くも半年が過ぎ、年に2度あるこの時を待ちわびるとともに、月日の流れを感じる日でもある。

本来、常夜燈として道行く人々の目にふれ、くらしの一部となっていたこの植松の灯籠は、時代とともにその役目を終え、本来の用途を果たさなくなったものが現在旧植田家住宅の庭に移設されている。いわば、かつての場所とは違った場所で、第二、第三の使命を全うしているといえる。また庭園には他に、春日灯籠や

マンジークン

安富士 暁



「何もないことの喜びと

あることの楽しみ」

雪見型灯籠、家型灯籠など9基の灯籠があり、来館者の目を楽しませている。

植松灯籠の日では、特に大きなイベントはないが、穏やかな灯籠の灯りそのものが夜の旧植田家住宅(ナイトミュージアム?)を盛り上げていく。また、江戸時代の浮世絵を用いた影絵が去年に引き続き二階の窓に投影され、中と外の両側からみることができるようになっている。

回を重ねるごとに、何か新しい試みをといる要求が高まる一方で、何もなくてゆったりとした時間が過ごせる心のゆとりも大切であること実感させられる。とはいえ、やはり「何か」によって人が集まり、それを人と共有できる喜びも大きいことは確かである。



外



昼



中



夜

落穂拾い

一 今東光の董風一 (二十三)

文・伊東健

生誕百三十年、没後五十年を迎える二〇一五年から二〇一六年を中心とした数年間を谷崎潤一郎メモリアルイヤーとして、中央公論新社が、さまざまな展覧会や講演会等のイベントを通じて、谷崎文学の魅力を伝えていることをご存じでしょうか。中でも、中央公論創業百三十年と谷崎の生誕が重なっていることもあり、昨年から記念刊行されている決定版「谷崎潤一郎全集」は、決定版にふさわしい貫禄に、最新の研究成果を加え、衰えない文豪の魅力を伝えてくれます。

日本の近代文学が成立してから、さまざまな作家の全集が出版されていますが、谷崎のように生前から幾種類かの全集を出すことのできる作家は特別な存在であると同時に、そのことだけでも、同時代での人気絶大であること、出版社からの信頼も篤いこと、作品の歴史性を評価されていること等が証明されて

いるともいえます。戦前に出版された改造社版等から、昭和三十年代の新書版全集に、逝去後でも今回を含め三種類の全集というのは圧倒的です。

それぞれの全集で趣向は凝らされていますが、谷崎の存命中である昭和三十二年十二月十日から中央公論社より刊行された新書版の全集には、当時の最新作「鍵」が収録され話題を呼んでいて、全集の月報で東光がそのことに触れています。特に、この第二十八巻が全集の最初の配本であり、附録の月報に寄せる東光自身が直木賞受賞により文壇復帰を果した年でもあり、喜びもひとしおだったかもしれません。以下に「最近の谷崎潤一郎先生」と題された文章より抜粋します。

最近、恩師谷崎潤一郎先生にお目にかかる毎に、御健康を恢復せられて来たことが僕には一番嬉しい。

その証拠には「鍵」という御作品を完成されたごとく、創作力においても御常態に復せられたからだ。日本の作家は六七十年の声を聞くのと、ともに創作力も衰え、まるで別人になつたかの如く老い込まれるのが多い中に、

あのように色艶のいい作品を生まれるということは、稀有の存在と言わなければならぬ。

(中略)

先生は僕の愛する河内にも興味を持たれ、その風物と人情をも愛して居られる。いずれ河内をも描かれるそうだから僕の期待はふくれあがっているのだ。

昭和三十二年十一月十日、愚禿の弟子東光坊春聴は、恩師が文化勲章を備用した傍に侍して、写真撮影する光栄と幸福を持った。若し読者がこの写真によって先生の健康体を御覧になられたならば、僕と共に先生百年の寿を祝福して下さると思つた。

谷崎を恩師と慕い、若い時から師事してきた東光でしたが、谷崎こそ東光文学の良き理解者だという側面もありました。谷崎のメモリアルイヤーに併せて、しばらく谷崎と東光のお話を続けます。



今氏と谷崎氏の貴重なツーショット写真が掲載された『文藝春秋』(昭和33年1月号)

[今東光資料館 所蔵]

【2016年8月～10月】

旧植田家住宅のご案内

今後の展示・企画

※毎月第1土曜日は「河内木綿体験(5名限定)」

// 第3日曜日は「むかし遊びの日」を開催

展示

◎7月2日(土)～9月11日(日)

企画展「植田家のお茶道具」

◇8/11(祝) 14:00から20分程度

ギャラリートーク(学芸員による展示解説)

◎9月15日(木)～10月19日(水)

通常展「大和川付替え関連展示」

◎10月22日(土)～12月23日(祝)

企画展「植田家にのこる浮世絵っ!？」

展示、イベント等のお知らせは
ホームページもご覧ください
<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

企画

(詳しくはお問い合わせください)

◎8月

28日(土) 連続講座「水(みず)③」(水とお茶道具の話)

◎9月

3日(土)かまどでご飯炊き体験!

◎10月

30日(日) 講演会「上方役者絵の話(仮)」

講師:北川博子(あべのハルカス美術館)



休館日カレンダー

■ = 休館日

□ = イベント開催日

8 August

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

9 September

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

10 October

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

●開館時間: 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

●休館日: 火曜日・祝日の翌日・年末年始
(詳しくは休館日カレンダーをご覧ください)

●入館料: 一般200円(団体20人以上で100円)
高校・大学生100円(団体50円)
※中学生以下、身体障がい者手帳等の所持者
および介助者は無料

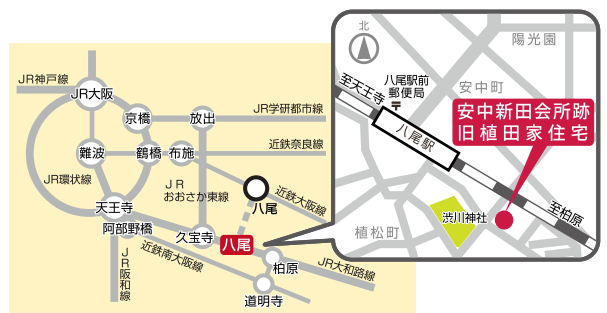
●お問い合わせ

〒581-0084 大阪府八尾市植松町1-1-25

TEL/FAX: 072-992-5311

E-mail: info@kyu-uedakejutaku.jp

※当施設には駐車場はありません。車での来館はご遠慮ください。



◇JR大和路線「八尾」駅下車、南出口より東へ徒歩約3分

◇近鉄大阪線「八尾」駅から近鉄バス藤井寺駅前

JR八尾駅前バス停下車、南東へ徒歩約5分

本当の幸せって？ 本当の豊かさとは？

モノや情報があふれ、それを大量に消費する社会。
人々の価値観は変わり続け、本当に大切なものは・・・

そのような中、人々の考え方は「利己から利他へ」「古き良きものを見つめ直す」のように、
人とのつながり、過去と未来のつながり、社会とのつながりを求めるよう
変化してきているのではないのでしょうか？

私たち、株式会社シーズクリエイトは情報を提供する立場にあります。
その情報を活かし、地域のヒト・コト・モノとネットワークを築き、
そのつなぎ役を担うことで新たなコミュニティを創造し、
地域経済を活性化させたいと思っています。

